様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 30 日現在

機関番号：12613
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号：21800022
研究課題名（和文）　運動部活動の存立構造に関する研究：ボランティアとしての教師の積極性に注目して
研究課題名（英文）　A study regarding the structure to establish and maintain extracurricular sport activities in Japan: focusing on voluntary willingness of Japanese teacher

研究代表者
中澤篤史（NAKAZAWA ATSUSHI）
一橋大学・大学院社会学研究科・講師
研究者番号：70547520

研究成果の概要（和文）：日本固有のスポーツのあり方である運動部活動は、いかなる構造の中で存立している／してきたのか。本研究では、運動部活動の存立構造を明らかにするために、ボランティアとしての教師の積極性に注目し、なぜ教師が運動部活動へ積極的にかかわるのかを、質的・歴史的アプローチから明らかにすることを目的とした。質的アプローチからは、中学校運動部活動へのフィールドワークで得られたデータを下に、顧問教師の運動部活動への意味づけ方を考察した。歴史的アプローチからは、戦後から現在までの運動部活動そのものと顧問教師のかかわり方の変遷を考察した。

研究成果の概要（英文）：In Japan, teachers not only teach students inside the classroom, but also manage extracurricular sport activities outside the classroom. This system of extracurricular sport activities is a distinctive feature of school education in Japan. This system is dependent on teachers' voluntarism. Then, why do Japanese teachers voluntarily sustain the system? The aim of this study was to clarify how the system of extracurricular sport activities in Japan were established and maintained by focusing on voluntary willingness of Japanese teacher. In order to achieve the aim, this study tried 1) to examine why teachers were willing to manage extracurricular sport activities through fieldwork at a public junior high school, and 2) to examine why Japanese teachers have needed sport through describing the postwar history of extracurricular sport activities in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 880,000 | 264,000 | 1,144,000 |
| 2010 年度 | 610,000 | 183,000 | 793,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,490,000 | 447,000 | 1,937,000 |

研究分野： 身体教育学
科研費の分科・細目：スポーツ科学
キーワード：運動部活動、顧問教師、ボランティア、フィールドワーク、意味づけ、戦後史

１．研究開始当初の背景

日本では、青少年期のスポーツ活動の中心は運動部活動である。これは、その中心が地域社会のクラブである欧州とは違った、日本固有の特徴である。しかし、この運動部活動は、政策によって存立しているわけではない。政策レベルで見ると、学習指導要領上で運動部活動の位置づけはあいまいであるため、学校や教師によって運動部活動へのかかわり方は多様である。さらに、教師のかかわりを保障する制度はきわめて不十分であり、時間的な超過勤務の問題や金銭的な手当の問題が残されている。つまり運動部活動の存立は、学校や教師の裁量に委ねられてきた。では、そうしたあいまいな政策にもかかわらず、運動部活動は、なぜ存立し続けているのか。そこには、いかなる構造があるのか。

これらの問いは、日本のスポーツ文化の基盤に関連することから、スポーツ科学全体にとって重要である。しかし、先行研究はそれに十分に答えられない。運動部活動を対象とした多くの研究は、運動部活動の教育的な意義、それが果たす社会的機能、学校や教師にとっての問題点を指摘してきたが（今橋ほか『スポーツ「部活」』1987、甲斐『高校部活の文化社会学的研究』2000 など）、運動部活動自体の存立構造を論じてこなかった。そのため、教育的な意義を持ち、社会的機能を果たす運動部活動が、そもそもどのように存立しているのかを説明できないし、また、いろいろな問題点を抱えながらも、なぜ運動部活動が存立し続けるのかを理解できないのである。

以上の学術的背景の中で、研究代表者は一貫して、運動部活動の存立構造の解明に取り組んでいる。これまでは主に、組織レベルに焦点を当てて、学校の組織編成や学校-保護者の関係が運動部活動の存立に与える影響を分析・考察してきた。それを踏まえてこれからは、個人レベルに焦点を当て、教師個人の意識や行動が運動部活動の存立に与える影響を分析・考察する必要があるとの着想に至った。なぜなら、運動部活動は、教師にとって公務ではない課外活動であり、それへのかかわりは基本的にボランティアだからである。そのため、運動部活動へ積極的な教師がいれば消極的な教師もいる。運動部活動の存立構造を個人レベルで解明するためには、どのような教師が、なぜ運動部活動へ積極的にかかわるのかを明らかにする必要がある。

そこで本研究課題では、実際の指導・運営場面に着目した質的アプローチと、歴史的背景に着目した歴史的アプローチから、ボランティアでありながら、なぜ教師は運動部活動へ積極的にかかわるのかを明らかにする。

２．研究の目的

本研究の目的は、なぜ教師が運動部活動へ積極的にかかわるのかを、質的・歴史的アプローチから明らかにすることである。

３．研究の方法

質的アプローチからの研究として、中学校運動部活動のフィールドワークで得られたデータをもとに、現在の顧問教師が運動部活動へ、いかに取り組んでいるかを考察した。具体的には、運動部活動に積極的な教師が、①多様性への対処、②活動機会の配分、③他の校務との兼ね合い、という指導上の困難にどう向き合っているかを考察した。

歴史的アプローチからの研究として、運動部活動への教師のかかわり方の変遷を通史的に考察した。考察の観点は、①実態：どれくらいの教師がどのように運動部活動へかかわってきたのか、②政策：教師をとりまく政策的背景はどのように変わってきたのか、③言説：教師の運動部活動へのかかわりは、どのように意味づけられてきたのか、の３つである。

４．研究成果

質的アプローチからの研究については、結果の一例をあげると、①の困難の場合、観察した運動部活動では、多様な生徒がいることで競技力の高い生徒が低い生徒をイジメる事態が生じた。これは、一見すると、典型的な指導上の困難に見える。しかし、運動部活動に積極的な教師は、こうしたイジメの事態を、ネガティブな教育問題ではなく、「生活指導をするチャンス」としてポジティブな教育機会としてとらえ返していた。こうした事例の考察を踏まえ、結論として、運動部活動に積極的な教師は、指導上の困難を教育的に意味づけ直して主観的に乗り越えていること、それゆえに積極的なかかわりを持続させることを指摘した。

歴史的アプローチからの研究については、結論として、教師が積極的に運動部活動にかかわってきた歴史的背景として、第一に、1945年から1950年代において戦後教育改革の文脈で、民主主義の象徴としてスポーツが高く価値づけられたこと、第二に、1960年代後半の東京オリンピック後の文脈で、一部の選手だけでなく全生徒へ平等にスポーツ機会を与えようとしたこと、第三に、1970年代後半から1980年代における生徒の非行問題の文脈で、その防止のためにスポーツが活用されようとしたことを指摘した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

（１）中澤篤史（2011）「学校運動部活動の変遷とジュニアスポーツ」『現代スポーツ評論』24、pp. 162-169、査読無.

（２）中澤篤史（2010）「オリンピック日本

代表選手団における学生選手に関する資料検討」『一橋大学スポーツ研究』29、pp.37-48、査読無.
上記論文は一橋大学機関リポジトリで公開しています。
http://hdl.handle.net/10086/18711

（３）中澤篤史（2009）「身体活動を伴う社会交流」『体育の科学』59、pp.728-733、査読無.

〔学会発表〕（計３件）

（１）Atsushi Nakazawa, 2011, "Why have Japanese schools needed sport?: A postwar history of extracurricular sport activities in Japan", Joint Conference of Association for Asian Studies & International Congress of Asia Scholars, Honolulu.　2011 年 4 月 2 日

（２）中澤篤史（2010）「戦後運動部活動の言説研究」日本体育学会、中京大学、2010 年 9 月 10 日。

（３）中澤篤史（2010）「運動部活動の戦後史」日本スポーツ社会学会、岩手大学、2010 年 3 月 29 日。

６．研究組織
(1)研究代表者
中澤　篤史（NAKAZAWA ATSUSHI）
一橋大学・大学院社会学研究科・講師
研究者番号：70547520